

戦跡を歩く9

今年は、沖縄戦終結から70年目の節目を迎えます。

戦争を体験した世代が高齢化する中で、戦争体験をいかに継承していくかが課題となつていきます。シリーズ9回目の今回は、母と姉とともに北波平から阿波根、

国吉、糸洲、小波蔵、糸満へと避難し、凄惨な戦場を目の当たりにした当時10歳の少年の体験談を紹介します。



は大城さんがたどった避難経路

戦争は終わっていない 大城実さんの戦争体験

●兼城国民学校

学校でのことはよく覚えていない。覚えているのは、校長先生が恭しく教育勅語を唱えた朝礼。あとは教科と関係なく竹槍訓練をさせられたこと。これは厳しかった。字ごとに軍事訓練や教練を担当する錬士がいて、米国のルーズベルトと英国のチャーチル、中国の蒋介石のわら人形を作り竹槍で刺す。一生懸命やっていたが僕は腑に落ちなかった。相手は鉄砲を持って降りてくるのに、本当に効果があるのかと聞いたら「はかなこと考えるな!」とげんこつを食らわされた。

●10・10空襲

実際に「戦争」を経験したのは1944年10月10日。あの朝、隣の先輩と一緒にマンガースのわなを仕掛けに村はずれに行っていた。突然、上空でボンボンと鳴る。見たら雲が浮いていて、その間を戦闘機が飛んでいた。先輩に促されて村に帰ると、馬場で駐留兵も村の人も「演習だ!」

と騒いでいた。しばらくして、那覇の北の方から煙が上がり戦闘機がこっちにもやってきて「これは本物だ」と分かった。

●祖父母との別れ

1945年5月初めごろに北波平のほとんどが全焼。ほかの5、6家族とメーバンドウクルと呼ばれる壕に避難した。

波平の北、武富の東側に小さな野戦病院の壕があった。祖母が艦砲か何かの破片で手をけがして、その壕で治療してもらおうとしたが、ぼぼ意識不明で運ばれた兵隊を医者が見て「兵隊さんでもあ

あだからやめよう」と帰ってきたと聞かされた。その数日後だったと思う。野戦病院が閉鎖され戦えない人は壕に残された。ある雨の日、重傷の兵隊たちが道を這いつくばって移動しているのを見た。それは僕にとつて非常に衝撃的だった。学校では「日本帝国は

【クニシビラ】

左右にくねくねと折れ曲がっている道はクニシビラ（国吉坂・現在の県道250号線の一部）。写真手前側に国吉集落があり、写真中央左側は真栄里の真謝原、右上は字糸満の佐場地原、与那堀付近。写真左奥では白煙が上がっている。点々と白く見えるのは砲爆撃の跡。大きな艦砲穴は戦後もあちこちに残っていた。

米軍は6月11日に国吉丘陵に進撃を開始。日本軍は激しく抵抗を続けていたが、16日にはほとんどの陣地が制圧された。多くの避難民がクニシビラを越えて国吉集落に逃げ込んだが、日米の攻防戦により多くの人々が巻き添えになった。

写真／米軍撮影の1945年6月15日の国吉丘陵（県公文書館所蔵）



●心を失ったクニシビラ

阿波根から潮平、兼城へと向かい報得川を越えて照屋へ。偶然父方の本家の家族と再会し一緒にクニシビラに向かった。そこは、海からの艦砲射撃と空からの爆弾、地上戦の砲弾とで草木も何もなく道らしい道ではなかった。僕は、母のモンペの端をつかまえて歩いたが、その

時の気持ちは今でも思い出せない。砲弾が破裂すると破片と一緒に血しぶきが、時には肉片が飛んでくる。その中を怖いとも、ああ死ぬんだとも、死にたくないとも思わずに歩いた。助けを求める無数の声にも心は動かず、人間らしい心を失って登った。戦争の本場の恐ろしさを思い知らされた場所だった。

●痛みで取り戻した感情

そして糸洲、小波蔵へ。残っていた大きな砂糖小屋に避難した。ある日、突然弾が飛び交い、母はとっさに僕の頭にかぶさった。何かの破片が僕の足に当たったり、ふくらはぎに妙な感覚がした。手を伸ばしてみると、血で真っ赤に染まり、骨が残っていないかった。

妙なことだが、痛みが僕に人間らしい感情を取り戻させた。「死にたい」と。生まれる前に亡くなった「父さんのところへ帰りたい、猫いらずを飲んで死のう」と叫んだらしい。本家のおじが「どうせ死ぬなら自分の墓で死のう」と言い、糸満の墓へ行くことになった。母は持っていた

●人を大切にすることを

失った左足は今でも痛みを感じる。真っ暗では寝られないし、花火の音を聞くと混乱する。戦争は終わっていない、僕はそう思う。

以前、孫たちが僕の義足をみて「おじいちゃん、足どうしたの?」と言うから「戦争怪獣にやられた」と答えた。しかし戦争を引き起こすのは怪獣ではなく人間。戦場では人間は人間でなくなってしまう。人間らしい思いを失ってしまう。人間を本当に大事にする社会を築き、子どもたちに受け継がなくてはと強く思う。

おおしろ みのる 大城 実さん

1934（昭和9）年トラック諸島の夏島生まれ。3歳から母の実家のある北波平で生活。戦後はハワイへ留学。沖縄キリスト教短期大学で教授・同学長を経て、現在は同特任教授として沖縄キリスト教平和研究所所長を務め、平和学の研究と発信に尽力。



過去のシリーズは、ホームページでご覧になれます。沖縄戦における糸満市の情報は、「糸満市史資料編7 戦時資料上巻」「同下巻」で詳しく紹介しています。お問い合わせ 生涯学習課 ☎840・8163